

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 日中戦争期の文学における二重性・情動・言語
—戦争文学を中心に—

氏 名 李 相 赫

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は個と集団との関係性における非-意識的領域の問題を明らかにするために、日中戦争期の文学とくに戦争文学を対象にしてその二重性と情動と言語(言葉)を分析する。

日中戦争期の戦争文学に関する多くの研究は、自律的な「近代的自我」という主体の概念や構造・文脈の観点をもとにして論じられてきた。それらの論を分類してみれば、時期によって1) 作家個人を重視する視座にせよ、2) 個人の内部と外部世界の構造を区分して各々の評価を下す視座にせよ、3) 外部の構造を重視に頂点を合わせた研究の視座にせよ、個人の意識的領域が主体の構成において決定的な役割を担うと見なすのである。

しかし精神分析学などから指摘するように、主体の構成に関与するのは単に意識的領域およびその意識形成に影響を及ぼす外部構造の問題だけではなく、非意識的領域という要素もあるからである。この非意識的領域、すなわち感覚-身体-情動などは意識以前の段階で主体を決定すると見なされる。最近の「情動の政治」という概念が流行するのは、まさに主体を決定する要素としての情動の重要性が浮き彫りになっているためだと思われる。それゆえ、個人が集団に包摂され集団の論理と情緒を伝達するようになる過程では、こうした非意識的領域が重要な役割を担っていると言えよう。さらに主体の構成にかかわる非意識的領域は欲望の二重的構造と密接に関連されているものであり、この欲望は言語の構造とも結びついていると思われる。

第1章と第2章は林芙美子を通して戦場体験の情動的側面について分析する。林の感覚と身体は情動(不安・恐れ)につながって「主体の揺らぎ」あるいは「自己同一性の切断」という心的現象を起こし、林は集団の感情に頼ってその心的現象を解決しようとする。またその過程に見られる二重性は林芙美子における二重的欲望の構造をあらわす証拠だと言えよう。火野葦平の「兵隊三部作」は、この集団への回帰が「感情の絶対化」という心的メカニズムにかかわっていることを見せてくれる。それに対

して、集団へ回帰していなかった埴谷雄高の場合にも、彼の感覚と情動は二重性を持ち、その二重性によって埴谷は集団から逃れようとする解体の可能性とともに近代の自己中心的な暴力性をもつようになると言えよう。

第2部は以上の役割を担当した情動および欲望が言語あるいは表現形式と密接な関連を結んでいるということを分析する。第5章と第6章は石川達三の戦争文学における表現形式的な特徴を分析し、第7章と第8章は報告文学と火野葦平における「ありのままの真実」、埴谷の「還元的リアリズム」という文学的方法について分析する。こうした分析を通して、言語が情動および時代の欲望にかかわっているのを明らかにする。